

2025年度 公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費 実績報告書

2026年 4月 30日

北九州市立大学長 様

(所属・職名)

文学部比較文化学科・准教授

(氏名)

夏 雨

公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	東アジアの古籍における新星		
交付額			
共同研究者	所属・職名	氏名	役割分担等
	太原理工大学・講師	李 雨珊	天文学の研究

1. 研究の目的

本研究は、新星に関する最新の天文学研究成果と、古代の中国や日本、朝鮮などの東アジア文化圏の古典籍における「天象異常」の記録を対比することを通して、天文学の新星に関する理論の更なる検証と、古代東アジアにおける自然観や社会思想についての考察を行う。

新星は、数日で明るさがもとの数万倍に達した後、次第に減光していくその特徴から、肉眼でも観測でき、科学的な天文観測手法が確立される前より、東西を問わず昔から観測され記録されてきたものである。

科学的な天文観測の歴史は約 250 年であり、その成果を通して、我々は宇宙の起源や進化、恒星及び星系に関する認識を多く得られた。一方で、中国をはじめとする東アジアの天文観測は、政治や占星術を目的としながらも、およそ 2000 年前から天空に起きた「異常現象」に対して長期の観測と記録を行ってきた。

そこで、本研究では肉眼でも観測できる新星に着目し、古代東アジアの天文観測記録を研究することで、新星、ひいては恒星進化周期の統計データを大幅に補い、現代天文学理論を補完することを目指す。他方で、古代東アジアの天文観測は単純な学術観察のみならず、ある程度政治的な意味合いも持つ。儒家的社会背景において、天人感應説などの思想も天文観測の記録に影響を与えた。現代天文学の手法を用いて、古代の記録の真偽やその描写方法を検討することで、そこに現れる自然観や社会思想についても同時に考察することが可能となる。

2. 研究の方法

本研究では、以上を踏まえて、最新の天文学研究成果をもとに、史料に記載された「天象異常」の位置、明るさ、色、及び尾の有無などの情報から、新星と彗星、小惑星、及び黄道の天体との区別を行い、本物の新星の記録対照研究を行う。また、現代の研究成果から得られた周期予測から、該当する時期の歴史文献における記録を探し出し、よりの確に記録の有無や真偽について検討を行う。更に、統計学的手法を用いて、異なる時期、異なる国で記録された新星の数に違いが生じる原因や、そこに反映された社会の認識や文化現象についても考察を行う。文献を収集、解読する際、我々は伝統的な古典の読み方に従い、二次文献や転載、訳載を避け、文献の原義を極力忠実に理解することに努める。記録と古代社会文化との関連について探求する際、史学研究の手法を用いて、歴史背景及び思想文化と関連付け、更に深く広く、掘り下げ、掘り広げていくことに努めたい。

3. 研究成果

国際情勢の変化により、当初予定していた対面での研究打合せおよび学会発表の実施が困難となった。そのため、本研究では当初の研究計画を一部変更し、主としてオンライン形式による研究討議、資料確認、文献調査および意見交換を通じて共同研究を進めた。

研究内容については、古代中国・日本・朝鮮半島における天象観測および天象記録の伝統を比較することを中心に据えた。とりわけ、宋代を中心とする客星記録に着目し、SN1006、SN1054、SN1181に関する中国・日本・高麗の史料記録を収集・整理した。そのうえで、各地域の史料における記載内容、観測制度、記録の有無、表現形式、記録が保存された文献の性格などについて比較検討を行った。

具体的には、中国側の史書・会要資料・類書、日本側の貴族日記・編年史・陰陽寮関係資料、高麗側の天文志資料を対象とし、各地域における客星記録のあり方を整理した。また、これらの記録を、単なる天文現象の観測資料としてではなく、古代・中世東アジアにおける天象観測制度、災異思想、史料編纂、史料保存のあり方と関連する問題として位置づけ、比較史的な観点から考察を進めた。

以上の研究成果をもとに、宋代客星記録を中心とする東アジア天象記録の比較研究について論文を作成した。